点数　各項目20点満点

No	タイトル	投稿者	評価者	怖さ	鋭さ	新しさ	ユーモアさ	意外さ	合計	書評
1577	ここ、おばけが出るみたい	京朔太郎	一般審査員A	17	17	16	17	17	84	怪異はマーケティングとセルフブランディングも上手い。「私、メリーさん。今、あなたの後ろ」のように自ら自己紹介することに加えて、状況までお知らせしてくれるのである。説明されることで、余計に怖さが追加される。説明されることで、人にも話しやすくなり、結果として怪異の知名度アップにつながる（怪異の名が売れる）。非常に巧みなマーケティング・セルフブランディング戦略である。大手広告代理店も見習うべきだろう。とはいえ、説明も何もなしにいきなり襲ってくればいいのかというと、そういうわけでもない。迷惑なんだか有難いんだか、よくわからない。こういう書評が冷静に書けることだし、そこまで新しい怪談とは思えなかった。
1577	ここ、おばけが出るみたい	京朔太郎	一般審査員B	7	7	8	7	8	37	冷たくなった母の描写で怖くさせるなら、捕まえられない謎の女性を出してしまうと意味が分からずボヤけるので、登場人物は生きている人の方がいい気がします。
1577	ここ、おばけが出るみたい	京朔太郎	一般審査員C	15	15	15	15	15	75	お恥ずかしい話ですが、読んだ時に内容を理解するのに時間がかかりました。わたしの理解力不足だと思いますが。主人公に執拗に関わってくる謎の女性、この人がどういう類のものなのか、伏線があるともう少しスッキリした内容になったのではないでしょうか。例えば、自分を見つけて欲しいお母様の若い頃の姿で、お母様と同じ位置にほくろがある、とか。また、主人公はなぜ亡くなったお母様をそのままにしておくのか、もう少しヒントが欲しいところです。サイコパス的な設定を狙ったのであれば、成功だと思いますが。
1577	ここ、おばけが出るみたい	京朔太郎	一般審査員D	17	14	20	20	19	90	不思議な世界観のお話でした。新しい形の死神のような存在なのでしょうか。お化け出るみたいというシンプルなワードチョイスも独特で面白いです。散文的な書き方が鋭さを鈍らせているように感じてやや点数は低めにさせていただきました。絵本のような流れでもちゃんと怖いしユーモアもあり、とても面白かったです。
1577	ここ、おばけが出るみたい	京朔太郎	一般審査員E	20	20	10	15	15	80	正直、文章が素朴でぎこちなく、小学生の日記のような雑さを感じましたが、最後のオチで全部持っていかれました。その雑さが怪談の生々しさを引き立てている気がします。素朴な文章を狙ったものなら、めちゃくちゃ高度なテクニックだと思います。チープさと人怖の不気味さが絶妙に同居した、印象に残る怪談だと思いました。
1577	ここ、おばけが出るみたい	京朔太郎	一般審査員F	17	14	15	15	18	79	最後、冷たくなった母がいる部屋に帰っていく、という一文に意外性があり、この話の主さんのサイコパス的な異常性を感じさせてくれるのに、途中の文面の表現の仕方だったり、誤字があったりするのがとても残念でした。勿体ない。「お化けが出るみたい」と言い残して歩き去る女性自身もきっと霊なんでしょうね。自分もお化けなのに。そこにはユーモアさも感じます。限られた文字数の中で話を書くというのは難しい事だと思います。でも、ショートでは、短い分、ミスや不自然な文体があると目立ってしまうので、本当に残念。
1577	ここ、おばけが出るみたい	京朔太郎	一般審査員G	14	12	11	13	18	68	最後の一文がとても良いだけに、そこに持っていくまでをもう少し丁寧に表現してもいいのかなと思いました。もっと日常から逸脱しない雰囲気で描くか、もっと異質にしてしまうか、落差がこのお話の肝だと思うので、もう少しどちらかに振り切った方が個人的にはいいなと思いました。
1577	ここ、おばけが出るみたい	京朔太郎	一般審査員H	18	17	17	15	18	85	全方向で怖いです。何なのこれ。聞いてないよ。怖さ、いや全部です。怖さメガ盛り。マンションで見かけた女はこの世の者でなく、噂の元は恐らく主人公の既に冷たくなっている母親。そして亡くなった母親と平然と暮らす主人公。いや、そもそも母親の死の原因は、、？など怖さMAXでした。鋭さ、序盤から粛々と話が進んでいきこのままかと思いきや最後で一気に切り掛かる。そんな印象です。新しさ、何と言うか短編で(恐らくは)幽霊である女性、噂の元の種明かし、人怖(主人公)を入れてきた所ですかね。なかなかリスキーだと思いますが、構成が上手いんでしょうね。違和感なく読めます。ユーモアさ、怪異よりも主人公のサイコパスさがパンチ強いところです。やっぱり、生きてる人間が一番怖い！となります。意外さ、これもマンションで見かけた女性がやはり死者であったと言う怪談ではよくある話だと見せて、実は語られている噂はどうやら本当らしい点、それがラストの一文で推測できる点。それが主人公の既にこと切れた母親であろう事。そして最も驚くべきは、母親を弔う事もせずに普通に生活している人物を主人公にした事です。
1577	ここ、おばけが出るみたい	京朔太郎	一般審査員Ｉ	13	11	12	10	13	59	幽霊が出るといっている女性が幽霊なんでしょうが、もしやその幽霊が目撃してる幽霊が部屋で冷たくなっているお母さんの幽霊なのかなと思ったらちょっと笑ってしまいました。
1577	ここ、おばけが出るみたい	京朔太郎	一般審査員J	16	14	15	15	16	76	よくわからない不思議な話だったが、主人公の母に関係していたのか？おばけは、何だったのか、という謎が解けないところが短編ならではだと思う。
			合計	154	141	139	142	157	733	

No	タイトル	投稿者	評価者	怖さ	鋭さ	新しさ	ユーモアさ	意外さ	合計	書評
1592	画面共有	黒カタツムリ	一般審査員A	19	18	18	17	17	89	恐怖とは何だろうか。この問いに答えることは難しい。とても難しい、哲学的な問題である。しかし、怪談が語られる時、それぞれの語り手の答えが、その怪談の中にはある。やはり、「狂気」や「驚き」のような要素は、必須だと思う。この怪談には、それらの要素が、高い水準で備わっている。短編でここまでの完成度はなかなかない。いや、ほんとに。今までの短編怪談の中で一番完成度高いと思う。審査項目も全部バランスよく高得点だし。短編における最高レベルの一つの基準として、投稿する人は全員読むべき。マジで。逆にこれを超える短編が現れたらそれは90点超えるね。そのために必要なのは、毎回言ってる怪談としての「品格」かなー。
1592	画面共有	黒カタツムリ	一般審査員B	6	6	7	6	5	30	ただ、イジメを受けているのかなという、印象しかない話で怖さというより、腹立つ感じですね。
1592	画面共有	黒カタツムリ	一般審査員C	18	18	18	17	18	89	現代のスタイルを取り入れ、非常にリアル感がある良い作品です。設定も不気味でおもしろい。主人公の立場に立った時、恐ろしさで体が震えました。職場の仲間が自分を殺すためのミッションを始動する・・・自宅はバレてしまっています。なぜ主人公は狙われるのか、その理由がわからないことも恐怖心を掻き立てられました。この主人公が殺されてしまった時、次のターゲットは誰なんでしょうね。一人、また一人と、姿を消し、最後にはそして誰もいなくなった・・・一本の映画にできそうですね。短い文章でこれだけ恐怖を詰め込みわかりやすく表現できる、作者の能力が高いと感じさせられる作品でした。
1592	画面共有	黒カタツムリ	一般審査員D	17	14	17	18	16	82	WEB会議で映ってはいけないものが映るのかと思いきや、完全に想像を超える展開を迎えて衝撃的でした。所謂人怖に分類される内容だと思いますが、本当に人間の恐ろしだけだろうかと疑うレベルの恐怖展開だと感じました。
1592	画面共有	黒カタツムリ	一般審査員E	15	10	15	15	10	65	自宅の地図が映し出される不気味さ、掲示板への殺害依頼という生々しさ、そして画面共有という現代的な舞台装置が相まって、じわじわと迫ってくる恐怖がとても良かったです。ただ、私個人の感想ですが、最後に「皆が薄ら笑いを浮かべて頷く」という広がりすぎるオチによって、恐怖が薄まって、散漫になってしまった印象を感じました。
1592	画面共有	黒カタツムリ	一般審査員F	19	18	19	17	18	91	これは怖いですね。主さんは佐藤さんはじめ、画面共有するチームメンバーに殺したいと思わせる程の恨みを買っているのでしょうか？Web会議ツール、というのも現代的で新しいですね。グーグルストリートビューが出て来るのも面白い。まあ、自分の家を検索されているのは怖いですけどね。「誰か◯◯を殺して下さい」と主さんを名指しで掲示板に書き込む佐藤さん。自分では殺らないんだ。他力本願ですね。でも、それに対してチームメンバー達が薄ら笑いを浮かべてゆっくり頷く様はかなり怖い。主さん、あなた、一体何をしたんだ！？
1592	画面共有	黒カタツムリ	一般審査員G	15	17	15	14	15	76	とんでもなく陰湿ないじめなのか、みんな狂ってしまったのか、どちらにしても怖いですね。自分の家が映し出されて、殺してくれと不特定多数の人が見る掲示板へ書き込まれ、その流れを中継で見ているのも想像すると怖いなと思います。現代的な、モキュメンタリーの出す怖さに近いような気がしました。 自分がそのミーティングに参加しているような感じに浸れる文章構成が良かったです。
1592	画面共有	黒カタツムリ	一般審査員H	12	11	14	11	16	64	怪談と言うよりは「世にも奇妙な」みたいなテイストの作品ですね。怖さ、主人公からすれば訳も分からないうちに殺される対象になった訳ですから、さぞかし怖いでしょうね。ただ、怪奇として読んでいる読者の立場からすると、「は？何で？」という不可解さの方が先に来ます。会社のチーム全体で主人公を「殺す」ことに賛成している理由が分かりません。主人公の素行にそこまで恨まれるものがあった、とか何か一つヒントが欲しいです。鋭さ、不気味さが前面に出ている分、鋭さはあまり感じませんでした。新しさ、web会議、Googleのストビュー、ストビューの掲示板で自分を殺してくれと願う何者かの存在を知る展開。ストビュー持ってくる辺りが今時ですね。ユーモアさ、ここは全く笑えない展開ですので、評価低くしてます。最後の皆の薄ら笑いは、その光景を思い浮かべると不気味さとシュールさで、これも一つのユーモアかとも考えましたが。意外さ、これはデジタルツールの使い方の上手さでしょうか。今やすっかり浸透しているものではありますが、それを、悪意の象徴として使う辺り意表を突かれました。いや、タイトル！と思いました。
1592	画面共有	黒カタツムリ	一般審査員Ｉ	14	12	11	10	12	59	web会議で殺人依頼。会社の人にお願いする。会社の人も請け負う。もう逃げ場がないという恐怖。会議の企画で上がるほど何を恨まれているのか。めちゃくちゃ恐怖。次回のわが社の会議でそんな企画があがらないといいな
1592	画面共有	黒カタツムリ	一般審査員J	18	15	16	15	16	80	最近の社会情勢ならではのヒトコワと思ったことと、全員の立ち振舞もとても怖いと思う。 世にも奇妙な物語の短編に出てきそうな話と思う。
			合計	153	139	150	140	143	725	

No	タイトル	投稿者	評価者	怖さ	鋭さ	新しさ	ユーモアさ	意外さ	合計	書評
1582	家族の名残	とみ しまこ	一般審査員A	15	17	16	18	18	84	人間が自分の置かれた状況を完全に認識することは、難しい。ましてや、怪異になってしまったことなんて、なかなか認識できないだろう。自分はあくまで人間だった頃の自分のままなので、外から見なければ、気付きにくいだろう。認めたくない気持ちもあるのかもしれない。こういう現象自体はあるあるである。ただ、ユーモアが強すぎて、怖さが少し犠牲になってしまっている。語りを工夫してみれば、もしかしたら、さらなる怖さを獲得できるかもしれない。関係ないのだが、小学生が、同じ小学生の幽霊たちの仲間になってしまって、二度とお父さんお母さんのもとに帰ってこれない、とかいう展開だったら怖いと思う。とにかく、実話という前提に立つのであれば、あとは語りを工夫するしかない。
1582	家族の名残	とみ しまこ	一般審査員B	7	6	8	5	9	35	まさかの登場人物が全員死んでるパターンですか。それだと怖いというより、ちょっとオモロいまであります。
1582	家族の名残	とみ しまこ	一般審査員C	18	18	18	15	17	86	とても良いです。まさか主人公がこの世のものでない可能性があるなど、想像もしなかったです。息子さんが自殺を繰り返すくだりが、物悲しく不気味で良かった。起承転結がしっかりしており、読みやすいのが好印象でした。主人公がこの世のものではないとしたら、どうして亡くなったのでしょうか。自殺をする前の息子さんに殴り殺されたのか、それとも、息子さんの後を追った妻に殺されたのか、もしかして2人が死んでしまったことへの後悔の念で、やはり自ら命を絶った？色々な可能性が想像でき、作品を楽しむことができました。
1582	家族の名残	とみ しまこ	一般審査員D	13	12	15	16	14	70	序盤で先が読めてしまったので、怖さと鋭さが控えめに感じました。短編は文末一つ一つを丁寧に綴って行くだけでも伝わり方が大きく変わるので怖さが増すと思います。
1582	家族の名残	とみ しまこ	一般審査員E	20	20	15	15	15	85	すごく好きな怪談です。主人公（父親）が生きているのか死んでいるのか、最後まで判然としない終わり方が最高に気持ち悪く、不気味な余韻を残しています。タイトルの「家族の名残」もまた強烈で、縛りつける響きがあり、その重さが作品全体の恐怖を増している気がしました。死んだ家族から逃れられない、毎晩続く怪異に狂気を感じさせる、秀逸な怪談だと思いました。
1582	家族の名残	とみ しまこ	一般審査員F	17	17	17	17	18	86	なかなか面白い作品でした。親に反発し、怒り任せに壁を叩き、恨み言を吐き、部屋から飛び出しマンションの屋上に上がり、飛び降りる息子。彼は先月亡くなっているが、毎晩現れてはそれを繰り返す。そして、息子の後を追うようにして首をつって亡くなった妻もまた、恨みがましい目で主さんを見る、という行為を繰り返している。自殺した人は同じ事を繰り返す、とはよく聞くので、ここまでは、まあ、怪談的にはあるあるな感じにも思えるけれど、「死人は死人らしく消えてくれ！」と叫んだ主さんに妻が囁いた一言は意外でした。主さんも死んでたの？と。結局、家族みんな同じ事を延々と繰り返してるんだな、と思うとちょっと物悲しさも感じました。
1582	家族の名残	とみ しまこ	一般審査員G	13	10	13	13	10	59	この一家のご主人は取り殺されてしまったのかなと邪推します。どんな人だったのかは詳しく語られずとも結末が示しているようですね。家族を大切にするというのは言葉で言うより実践が難しいですが、誰かを追い詰めるほどのことをして無自覚なのはそもそも狂っていたのか？と色々考えてしまいます。出だしがショッキングなので、後半の衝撃がちょっと薄れてしまったのがもったいないように感じました。息子と妻が実は死んでいる、そして自分も？というのを後半たたみかけるように表現してみると一気に雰囲気が変わって良いかなと思います。
1582	家族の名残	とみ しまこ	一般審査員H	11	12	11	10	11	55	こう言っては何ですが不快でした。父親の傲慢さが垣間見えて。怖さ、序盤から息子が飛び降りて既に死んでおり、死してなお自殺を繰り返す始まり。ここが先ずありきたりで怖さが無くなります。続けて妻。恨みがましい目で見てくる妻も既に自死している。ここも予定調和。そして、ラスト。妻の言葉で主人公もなくなっているのか？と匂わせる締め方。先が何と無く読めてしまうんです。鋭さ、もあまり感じません。登場人物達の言葉が強く、感情的で鋭さが損なわれています。新しさ、これは物語の構成が三段落ち(？)になっていなければ、ラストでひっくり返る場面が活きたかも知れませんが、オチが途中で読めて何と無く分かってしまうため、新しさとして捉えられませんでした。ユーモアさ、は全く感じ取れません。先ず父親がクズすぎます。我が子と妻が亡くなったと言うのに、悲しみも弔いの気持ちもおよそ感じられません。かと言ってサイコパスという訳でもない。ただの嫌な奴です。意外さ、ここもかなり弱い。短編で怪異を書こうとすると色々と制限されるでしょうから、仕方ない部分はあるかと思いますが、詰め込みすぎです。自殺を繰り返す息子と、妻は具体的な描写は省いて淡々と主人公に語らせてみても良かった気がします。そして、最後の瞬間だけ妻の囁きが聞こえる、とか。
1582	家族の名残	とみ しまこ	一般審査員Ｉ	11	12	13	14	15	65	おーみんな死んでいた（笑）そして旦那さんだけ自覚がない（笑）自殺した人はその時の状況を繰り返すというので息子さんは死人らしいことをしているのでは。。。もしや旦那さんが息子さんの死の原因なのかな？それとも死んだ自覚のない旦那さんにイライラしてるだけなのかな？？奥さん
1582	家族の名残	とみ しまこ	一般審査員J	17	17	18	18	19	89	まさか主人公もとは思わせたところも秀逸だった。更にコミュニケーションも取れているのに同じことを繰り返す霊というもの非常に怖いと思う。
			合計	142	141	144	141	146	714	

No	タイトル	投稿者	評価者	怖さ	鋭さ	新しさ	ユーモアさ	意外さ	合計	書評
1546	また あそぼうね	朧紙	一般審査員A	16	17	16	16	15	80	記憶というものは曖昧なものである。特に、それが幼年期のものであれば、なおさらである。幼年期、というのは純粋で、知識や理性的思考が少ないために、怪異との接触が起こりやすい時期である。つまり、我々は大人になりすぎているのだ。怪異というものは、知識や理性の対極に位置するからこそ、恐ろしいのである。大人の方が大切なものを見落としているのかもしれない。怪異たちは、それに気付かせてくれる。もしかしたら怪談というものは、そのために存在しているのかもしれない。切り口は、鋭い。攻撃こそ最大の防御。長所を伸ばそう。さらに鋭くすれば、他の項目もついてくる、かも。
1546	また あそぼうね	朧紙	一般審査員B	7	7	6	6	6	32	夏休みまた遊ぼうね、なら冒頭で今が夏休みで遊びに来ている描写が必要ですし、記憶に無いんじゃなくて微かに覚えているくらいの方が現実的で怖さが引き立ちます。
1546	また あそぼうね	朧紙	一般審査員C	15	15	15	15	18	78	蝉が鳴き止んだと同時に、たくさんの子供らしき足音が聞こえてくるという表現、とても恐ろしくて良いと思います。「またいっしょにあそぼうね」というのが、赤で書かれているのも気になります。なんとなく、不気味さを、不穏さを感じますね。そして、この方の文章の表記の仕方が好きです。適度に改行や空白があり、読んだ時に頭に入ってきやすい。再び出会ってしまった時、主人公には何が起こるのか・・・想像するだに恐ろしいです。結果を読み手に想像させる構成、とても良いと思いました。
1546	また あそぼうね	朧紙	一般審査員D	16	16	17	18	18	85	夏休みの祖母の家＝お盆、と勝手に脳内で状況が補完されてしまい怖さが倍増しました。子どもの頃のノートや日記を見つけると懐かしさでほっこりするものですが、見覚えがない自由帳がなぜ祖母の家に保管されていたのかも不可解。一歩目から不気味な雰囲気が漂っており、畳みかけるように起こる怪奇現象が怖いもののうっすら先が読めてしまうため少々点を抑えさせていただきました。
1546	また あそぼうね	朧紙	一般審査員E	15	10	10	15	15	65	色の描写がいいですね。定番ですが、赤いクレヨンが登場したことで、一気に空気がひきしまった印象を持ちました。個人的な好みですが、子どもの名前がびっしり並んでいる事で、白いノートが見えなくなるような描写が一文あると、より色をつかった緊張感が増す気がしました。音が消えた事で別の世界に切り替わったような表現が最高ですね。
1546	また あそぼうね	朧紙	一般審査員F	18	17	18	16	17	86	祖母の家で主さんが見つけた昔の自由帳。表紙に自分の名前が書いてあるが、見覚えがないという。まあ、忘れている場合も無きにしもあらず、だけれど、中はほぼ白紙なのに、最後のページに赤いクレヨンで《なつやすみ、またいっしょにあそぼうね》と大きく書かれている。そして、その下には見覚えのない沢山の子供の名前。こういう想像系のお話は意見が分かれるところかもしれないけれど、私は好きです。最後の蝉の鳴き声が一斉に止んで静かになった夕方、裏口から走る音が近づいてきた、というところだったりも、何が？幼い頃の自分？それとも見知らぬ子供達？と、読む側の想像力に委ねられるような怖さは面白いですね。
1546	また あそぼうね	朧紙	一般審査員G	17	15	10	14	12	68	ゾクッとするお話でした。急な場面転換が良いですね。田舎出身なので、セミが一斉に鳴きやむというその異様な雰囲気をイメージしやすくて息を呑む感じがよく伝わります。日常からの逸脱をどのようにするかというのが短編だとより精密に求められると思うので、その点が高評価に繋がりました。走ってきている恐らく昔の友達は一体どんな存在なのか、考察が捗りますね。ポジティブに考えれば鬼太郎みたいな存在ですし、そうでないなら道連れにしようとしている何かでしょうね。
1546	また あそぼうね	朧紙	一般審査員H	17	17	16	13	16	79	シンプルにありありと情景が浮かんできます。怖さ、昔の自由帳、赤いクレヨン、沢山の子供の名前、ラストの一文。怪異の要素が揃ってて、怖いです。鋭さ、一文一文の中に迫り来る恐怖がこめられていて、切り口鋭いですね。新しさ、すぐそこまで迫ってきた怪異、で締めくくる点です。どうしても何か付け足したくなると思うんですが。そこから先は読み手に任せるような印象でした。ユーモアさ、自由帳に書かれた何十という子どもの名前。しかも赤いクレヨンで。怖面白いです。意外さ、最後に走る足音が近づいてきた、という終幕です。果たして主人公は無事で済んだのかどうか、、？
1546	また あそぼうね	朧紙	一般審査員Ｉ	14	12	12	11	12	61	最後に書かれたメッセージは誰の文字だったのかな？幼き頃の自分の文字だったのか？他人の文字だったのか？大人の文字なのか？子供の文字なのか？メッセージの内容もだが、文字の特徴を明かさないことで、いろいろ想像してしまって怖かったです。
1546	また あそぼうね	朧紙	一般審査員J	16	15	15	14	17	77	主人公が過去にどんな人達と会っていたのかが不思議さと謎を読者に思わせつつ、恐怖も感じさせる良さがあった
			合計	151	141	135	138	146	711	

No	タイトル	投稿者	評価者	怖さ	鋭さ	新しさ	ユーモアさ	意外さ	合計	書評
1562	写真を撮ってください	京朔太郎	一般審査員A	15	17	16	16	16	80	物事に対する見方は人それぞれである。ましてや、怪異も含めるのであれば、見方の幅は広がり、とても多様性に満ちたものになるだろう。ふとした瞬間に怪異と出会うとき、自分の世界は確実に広がる。世界が広がるのは楽しい。自分の世界が広がるということは、学びにもなる。だが、こういう風に、綺麗にまとめられるということは、まだまだ恐怖や狂気が足りていないのかもしれない。切り口は鋭い。もっと深く切り込もう。もっと深淵へとおりてゆこう。こっちが見ていられないほどの、狂気の深淵へ。世界が広がった、その、先へ。可能性はどこまで広がるだろうか。
1562	写真を撮ってください	京朔太郎	一般審査員B	6	6	7	6	6	31	確かに火葬場で写真を頼まれたら、ちょっと怖いですけど顔がブレてて良く撮れてるは返しが変ですね。なんでブレるの！って言って豹変して去った方がストレートで良い気がします。
1562	写真を撮ってください	京朔太郎	一般審査員C	15	16	17	17	15	80	顔がブレた写真がよく撮れているとは、いったいどういう意味なのでしょうか。本当にブレているのか、主人公にだけブレて見えるのか。そして、火葬場という特殊なシチュエーションで写真を撮ってくれとは、依頼主は生きている人間だったのか。なぜ写真を撮る必要があったのか。謎は深まるばかりです。考察のしがいがあり、読み直してしまいました。何度も楽しめる良い作品です。主人公が写真を撮ったことによって何か障りがあったのか、とても気になっています。少しその辺りのくだりに触れられていると、もっと印象深い作品になったのではないかと思います。
1562	写真を撮ってください	京朔太郎	一般審査員D	18	19	19	18	17	91	鋭さがいいです。少しずつ情況が明らかになって一番嫌なところで終わる流れも見事。ショートならではの楽しみ方をさせていただきました。
1562	写真を撮ってください	京朔太郎	一般審査員E	15	10	15	15	15	70	火葬場という舞台がオチにする構成が効いていて、不意に背筋がぞくっとする良いオチになっていました。広い待合所で知らない人に声をかけられる情景も現実味があり、読者が状況を想像しやすい点も魅力です。短くまとまっていながら謎を残す、完成度の高いショート怪談に仕上がっていると感じました。
1562	写真を撮ってください	京朔太郎	一般審査員F	16	16	18	17	17	84	心霊写真として扱われるものの中には一部だけブレているようなものを見たりする事はあるけれど、「写真を撮って」と頼まれて、撮ってあげて確認したところ顔がブレていたら、普通はこの主さんのように『あれ？』ってなって、気にするだろう。でも、その依頼者は「よく撮れている」と言って気にもしないで行ってしまった。おかしいですよね。で、その依頼者の顔を思い出そうとするも、思い出せず、男性か女性かもわからない。不思議ですね。という事は、やはり依頼者は霊だったんですかね。よく、霊の話をしていて、顔を思い出せない、というのは聞きますしね。写真を撮って欲しいと自ら言ってくる霊、というところには新しさを感じました。
1562	写真を撮ってください	京朔太郎	一般審査員G	13	12	17	17	13	72	最後の瞬間も記念にしたかったのかな、と思いました。今は何事も写真に記録して残しておく文化ですからね。よく撮れてる！と喜ばれたということは、成仏できたと思います。日常の隙間に現れるちょっとした怪異というのがいいですね。怖さというと少し弱いですが、文章が読みやすくて後から思い返すと…という時間差の落ちがジワジワ効いてくるのが良かったです。
1562	写真を撮ってください	京朔太郎	一般審査員H	11	10	14	14	16	65	物語としては悪く無いと思います。面白いとも感じました。ただし、それと怖さを感じるかは話が別です。写真を撮ってください、と頼まれ主人公にはブレて見えるも何故か頼んだ方はよく撮れていると満足気に去る。何故か主人公は頼んで来た人の顔を思い出せない。今、見たばかりだと言うのに。で、最後のオチ。この一連の流れに緊張感、緩急が無く、何が起こっているのかと言う恐怖も感じられない。怖さを感じる瞬間が無いように思います。鋭さ、も特には感じませんでした。短編故かもしれませんが、状況説明や場面展開がサラッと流れていく様に思え、それだけに鋭さが著しく欠けている様に感じました。新しさ、火葬場で死者？に写真を撮ってくださいと頼まれる。目的は分かりませんが。設定として新しいと思います。ユーモアさ、新しさと重複しますが、火葬場、写真、撮る側、撮られる側、発想がユニークですね。意外さ、これはラストの種明かしまで、何が起こっているのか分からなくしてある点です。火葬場！そういう事かぁ！となりました。それだけに怖さに繋がっていないのが残念です。
1562	写真を撮ってください	京朔太郎	一般審査員Ｉ	13	11	10	10	13	57	旅行かと思って読み進めたらまさかの火葬場。確かにそんなところで写真は撮らないですよね。お願いしてきたのは、生者だったのか死者だったのか。顔が思い出せなかったりするところで死者かなとは思いましたが、死者のほうには自分の顔が見えていたのか、もしくは死者は１番に自分の顔を忘れると聞くので、それでよかったのか。不思議です。
1562	写真を撮ってください	京朔太郎	一般審査員J	15	15	16	17	15	78	火葬場だったとは思わず、どこなんだろうと思わせて、最後に被写体は、人ではなかったのかというところをユーモアっぽく話ができているところが良かった。でも冷静に考えるととても怖いと思う。
			合計	137	132	149	147	143	708	

No	タイトル	投稿者	評価者	怖さ	鋭さ	新しさ	ユーモアさ	意外さ	合計	書評
1559	××は好き？	京朔太郎	一般審査員A	17	16	15	15	15	78	人は反応してしまうのである。何かアクションを仕掛けられると、反応せずにはいられない。好意的に返す、怒る、無視する。すべて反応である。なぜなら、「仕掛けられたアクションそれ自体」を認識しない、ということはできないからである。認識しなければ、反応する必要もないのだが、それは無理である。つまりは、仕掛けたものの勝ちなのだ。ここに怪異の暴力性がある。それはもしかすると、こちら側にも当てはまるのかもしれない。その場合、先手必勝である。「怖さ」以外にも項目があることは意識してもよかったかもしれない。他の怪談との比較とかもしてみると、さらによくなる、かも。
1559	××は好き？	京朔太郎	一般審査員B	6	7	6	6	8	33	お婆さんまでは分かりますが家にあった鯛焼きの中に白髪は謎すぎます。霊にしても人怖にしても無理がありすぎて怖さに繋がりません。
1559	××は好き？	京朔太郎	一般審査員C	16	15	16	16	17	80	想像を超えた内容でした。××が好き、とは、なんだったのか。白髪？それとも、たい焼き？はたまた髪の毛入りのたい焼き？謎は深まるばかり。読み手に考えさせる手法は、印象に残るのでとても良いです。黒髪ではなく白髪が呼び起こす恐怖というのは、意外性があって高評価です。黒髪より、むしろ不気味ですよね。人怖の要素があるのも、良い構成だと思います。1話で2度美味しいという感じです。改行や空白、カギカッコの使い方も素晴らしいです。見た目がスッキリしていて、内容の怖さに集中して読めました。
1559	××は好き？	京朔太郎	一般審査員D	17	14	17	17	15	80	最初から最後まで厭な話でした…何が好きか尋ねたのでしょう。なんとなく髪の毛ではない気がして、気になります。
1559	××は好き？	京朔太郎	一般審査員E	10	20	10	15	15	70	テンポの良いショート怪談ですね。「××は好き？」の伏線を何で回収するのか、ワクワクしながら読み進めました。髪の毛を噛んでしまったという気持ち悪さが尖ってて高得点をつけさせて頂きました。「××」の部分は謎のまま。というオチもいいですね。余韻を感じました。
1559	××は好き？	京朔太郎	一般審査員F	17	15	16	16	17	81	怖いというか、とにかく気持ち悪いですね。話しかけてきた初老の女性の風貌もしかり、友人の答えを聞いてニヤリと笑ったり、家に帰って置いてあったたい焼きを食べたら、中から先程話しかけてきた女性のものとおぼしき髪の毛が出て来るとか…。そりゃ、吐き捨てますって。XXが何だったのかはわかりませんが、「私のことは好き？」とか、「髪の毛は好き？」とか、そんな事を言っていたのでしょうか。友人もあまり適当な返事をするのはやめて欲しいですね。
1559	××は好き？	京朔太郎	一般審査員G	13	13	12	10	10	58	悪ふざけからとんでもないことに巻き込まれていくというのは大きなことから小さなことまで生きていれば経験があると思います。その巻き込まれた事態がやっかいだったのは残念ですが。幽霊というより妖怪とか、貧乏神みたいな、厄介の中でもピカイチのやつみたいで嫌ですね。人の髪の毛が口に入ったときの何とも言えない不快感と、その出所がおかしな存在という二重の部分にゾクッとしました。
1559	××は好き？	京朔太郎	一般審査員H	11	10	11	10	11	53	かなり渋めの評価となりました。怖さ、そもそも怖く無いです。おばぁさんは不気味ではあるし、気持ち悪いですが、怪奇とは違うと感じました。言動が意味不明すぎるのと、何で鯛焼きから白髪！？の訳のわからなさが逆に恐怖を遠ざけてしまっています。鋭さ、ここもほぼ感じませんでした。怖さを出そうとして過剰に演出しすぎて、鋭さが消されていると感じました。新しさ、これも予定調和の範囲内、といった感じでした。不気味な老婆に話しかけられて、聞き取れない質問に不用意に答える友人。この後碌なこと起きないなと言うのが容易に想像できてしまう為、この点数としています。ユーモアさ、これも少なくとも私にはわかりませんでしたね。老婆の気味の悪さはある種の笑いを誘いますが。意外さ、ここも特に意外性は感じられませんでした。鯛焼きから白髪が、という部分もそこだけ抜き出せば意外なものを使うとは言えますが、全体的に見ていて起こる事象としては決して意外ではないです。
1559	××は好き？	京朔太郎	一般審査員Ｉ	13	11	12	11	11	58	何が好き？って聞かれたんだろ？まさかピンポイントでたい焼きじゃないだろうし。。。白髪でもないだろうし。。。なんと聞かれて好きと答えたらこんな状況になるのか？？こわ。聞き取れなかったときはちゃんと聞き返そうと思ったし。ちょっと友達恨むかも
1559	××は好き？	京朔太郎	一般審査員J	16	15	18	15	15	79	薄気味悪い話だった。ひたすらに薄気味悪いと思わせる以外になかった。
			合計	136	136	133	131	134	670	

No	タイトル	投稿者	評価者	怖さ	鋭さ	新しさ	ユーモアさ	意外さ	合計	書評
1541	顔なじみの乗客	幻月 沙波	一般審査員A	16	16	16	17	16	81	一度こちらがあちらを捕捉すると、あちらもこちらを捕捉する。ニーチェが言ったように、お前が深淵を覗くとき、深遠もまたお前を覗くのである。つまり、捕捉しなければ、怪異に魅入られることはない。これは、無関心が蔓延する社会において、怪異が生きづらくなっていることと関係がある。ごく日常的なものでも、こちらが補足することさえできれば、それが怪異だと気付くはずである。実はこの世界は狂気であふれているのだ。みんな怖くてそこに近づいていかないだけである。まあ、自分から近づく必要もないのだが。ダレニモイウナヨと言われて、ここで発表した度胸に敬意を表したい。ユーモアがある。ただ、不思議が不思議のままである度合いは考えてみてもいいかもしれない。
1541	顔なじみの乗客	幻月 沙波	一般審査員B	8	8	6	6	7	35	どの電車にもその女性が居るってことなんですかね。誰にも言うなよって自分が出てきておいて変な感じがしました。
1541	顔なじみの乗客	幻月 沙波	一般審査員C	15	15	15	15	18	78	これは意外でした。同じ電車に乗るから会える女性だと思っていたのに、違う電車に乗っても会えるとは！電車ではなく、主人公に憑いていたのですね。この意外性がとても良かったです。翌日から、主人公はこの女性に会うのでしょうか。とても気になります。このモヤモヤ感を残した締め方は、次の作品を読みたくさせる魔法のテクニックだと思います。また、文章の書き方も視覚にうったえていて、読み手の色々な感覚を刺激する良い工夫だと思いました。口頭で読み上げるだけだと、この工夫がリスナーに伝わらないのでもったいないですね。
1541	顔なじみの乗客	幻月 沙波	一般審査員D	17	18	17	17	17	86	通勤電車だと毎日同じような顔ぶれと同じ車両に乗り合わせるのは私含め多くの人が経験している状況だと思います。その中でこの世の者ではない何かが紛れていたとしても、誰も気に留めることもないでしょう。自分が体験したら本当に嫌だと思います…それにしても、この存在は田中さんのことが気に入っているように感じました。だから危害を加えるのではなく、口止めだけで済んだのではないでしょうか。自分の日常にも起こりそうな怪異ではあるものの、通勤電車に乗り続けに「何か」に遭遇してみたい欲が湧いてくるちょっと不思議な話で個人的にとても好きです。
1541	顔なじみの乗客	幻月 沙波	一般審査員E	5	10	10	15	10	50	会釈でもしてみようかな…という田中さんの思考に、すでに気味の悪さを感じました。さらに「例の女性」に弄ばれる展開にはユーモアもあり、読後に妙な笑みがこぼれます。女性の怪異も不気味ですが、冒頭の田中さんの思考もまた不気味で、この二つの気味悪さがより巧みに絡み合えば、より個性的で尖った怪談に仕上がるように思いました。
1541	顔なじみの乗客	幻月 沙波	一般審査員F	17	16	16	17	17	83	通勤時間といえば、だいたいは決まった時間の人が多いだろうし、乗る電車、車両も決まっている人は多いだろう。という事は他の人も自分と同じようなルーティンの人がいて、同じ人と乗り合わせるのは容易に想像出来る。毎朝隣り合わせる人なら意識してしまう事もあるかもしれない。でも、たまたま乗り遅れ、見送った電車に意識した人が乗っていて、向こうも自分に気付いて笑ったのを見たら、気恥ずかしさを感じてほっこりしただろう。と思った直後、次の電車にまたその人が乗っていたら怖い。そこは意外性もありますね。「ダレニモイウナヨ」と耳元で言われるのも怖いけど、泥のように崩れて消えたというのはちょっとユーモラスにも感じました。
1541	顔なじみの乗客	幻月 沙波	一般審査員G	12	11	10	10	10	53	田中さんからの伝聞なのだとしたら、田中さんは大丈夫なんだろうか？と気になりますね。なんとなく、そんなに強烈な存在ではないんだろうけど、執着心は強そうな存在なのかなと考えました。シンプルなお話で構成もとても良かったのですが、怖さという点が少し弱いように感じました。女性の異質さをもう少し強調するか、逆にもっと当たり障りない内容から急転させるか、文字数の制限があるので難しいところですが、別の表現で改めて読んでみたいなと思いました。
1541	顔なじみの乗客	幻月 沙波	一般審査員H	15	16	13	11	12	67	電車での怪異、定番ですね。怖さ、クスクスと笑う女の様や、「ダレニモイウナヨ」とつぶやきながら崩れていく様は不気味で怖かったです。鋭さ、田中の何気ない日常が「女」との出会いで一変する様の切り替わりが上手いな、と感じました。新しさ、ここについては弱いと思います。電車にまつわる怪異が先ずありがちな点、敢えてそこを選んだのなら不気味な女、を登場させるのは悪手だと感じます。怪異の元がコレだとすぐ分かってしまうためです。ユーモアさ、最後の女の「泥のように崩れて消えた」というオチで少し笑ってしまいました。ただ、トータルで見ればユーモアさは特には、、無かったと思います。意外さ、敢えていうならやはりラストですかね？女の消え方が特殊と言いますか。いわゆる幽霊とはまた別物なのかな？とも考えました。何か呪物的な。生き人形？のようなものなのかと。いかんせん、前半から中盤の展開がベタなので(すみませんが)この点数にしています。
1541	顔なじみの乗客	幻月 沙波	一般審査員 I	13	12	11	10	12	58	その女性の姿は周囲の人には見えてなかったんでしょうか？なぜ田中さんにだけ見えてたのか？しかも彼女は田中さんに見えてることはわかっている。電車の時間が違っていてもあってしまうだけでも怖いのに最後に崩れないでほしい。目の前でやられたら叫んじゃいそうです
1541	顔なじみの乗客	幻月 沙波	一般審査員J	18	15	15	15	15	78	短編ならではの短いストーリーの中で恐怖を感じさせる面白い話だった
			合計	136	137	129	133	134	669	

No	タイトル	投稿者	評価者	怖さ	鋭さ	新しさ	ユーモアさ	意外さ	合計	書評
1542	呼び鈴	朧紙	一般審査員A	14	14	14	14	14	70	怪異はさびしいのだ。高度に情報化され、インフルエンサーたちが活躍する現代社会において、誰かの注目を浴びるということは非常に難しい。だから、少しでもいいから人と関わりたい。怪異に遭いたくなければ、どこかに行くのだとして、どこからその行動が仕組まれているのか、考える必要がある。怪異たちは実は、プログラミングが得意で、人が自分たちに出会うよう、プログラムを組んでいるのである。怪談をたくさん聴いたり読んだりしていると、そのプログラムのコードのようなものがわかってくるのだ。基本的な語りはある。あとは、応用的なものを付け足していくといいと思う。可能性無限大。
1542	呼び鈴	朧紙	一般審査員B	8	6	6	6	6	32	単純に知らない人が呼び鈴なおして不法に住んでるだけですか。別に深い意味があるなら知りたいです。
1542	呼び鈴	朧紙	一般審査員C	15	15	15	15	15	75	近づいてきた足音は誰なんでしょう。おばあさまなのか全く別のものなのか・・・呼び鈴だけが新しくなっているというのが、人間の押したい、という気持ちを掻き立てますね。出てきたものに会ってしまったらどうなるんだろう、と想像するとゾッとします。また、このシチュエーションは人怖、もののけ怖の要素もあり、短い文章でいろんな楽しみ方ができると感心しました。呼び鈴以外は荒れ果てているというのが、呼び鈴の不気味さをさらに引き立てとても良かったです。主人公が何の気なしに立ち寄ったのは、何かに呼ばれたからかもしれませんね。
1542	呼び鈴	朧紙	一般審査員D	18	20	17	19	18	92	短編の中でもさらに文字数が少ないにも関わらず、脳内ではっきりと状況が映像として浮かびました。この後どうなったんだろう、そもそもここに棲んでいるものは何だろうと読み手に想像させる余地を多く残しているところも素晴らしい。そしてちゃんと怖い。家主がいなくなった家に何かが勝手に棲みつくという話はよくありますが、インターホンまでが新しくなっているというだけでここまでわくわくできるものかと感動しました。
1542	呼び鈴	朧紙	一般審査員E	10	10	10	15	10	55	短いながらも情景描写が巧みで、廃屋に似つかわしくない「新しい呼び鈴」が不気味さを一層引き立てています。声と靴音が近づく場面は臨場感があり、読者に怪異か侵入者かを想像させる点がいいですね。ただ、不気味な「新しい呼び鈴」が中途半端な伏線的要素になった印象をうけました。もう一歩深掘りして欲しい気もします。
1542	呼び鈴	朧紙	一般審査員F	17	17	17	15	17	83	最初、誰も住んでいない祖母の家に立ち寄った主さんが中に入り、そこへもう鳴らないはずの呼び鈴が鳴るパターンか、と思って読み始めたら、違いましたね。呼び鈴だけが新しくなっていた、というのは斬新で意外かも。押してみたら、「はい」と中から返事する声がして、靴音がだんだん近づいてきた、というのは生きている人でも霊でもどちらにしても怖いですね。誰！？ってなりますよね。勝手に誰かが住み着いていた、と考える方がより怖いかもですね。でも、悪事を働いている人なら他の人には知られたくないはずだし、呼び鈴をわざわざ新しくする意味がわからないですよね。不気味ですね。
1542	呼び鈴	朧紙	一般審査員G	13	12	13	12	11	61	誰なんだろうか？祖母ならいい話、それ以外なら怖い話になるような。シンプルで読みやすいので、もう少し怖さを感じたいなと思いました。あともう一つ何か恐怖を感じられるアクセントなり、一文なりあるとより完成度が高くなるような気がします。どうしても字数の制限があるので難しいとは思いますが、例えばゆっくりと近づいてくる足音にプラスして玄関のすりガラスから影や顔が見えたとかがあると、目の前で対峙していることがより感じられるので良いかなと思います。
1542	呼び鈴	朧紙	一般審査員H	13	12	15	14	15	69	うーん。評価に迷いました。怖さ、奥から返事した者が心霊的なものか、人怖か、それとも単に新しい住人が越してきただけなのか？その曖昧さが上手く怖さに繋がっていない為、恐怖を感じませんでした。鋭さ、何せ極めて短文で仕上げている為、状況説明に寄ってしまってます。鋭さはかんじませんでした。新しさ、ここまでコンパクトにまとめて怪異を表現しようという点では確かに新しいですね。ただ、情報量が少なすぎます。ユーモアさ、そもそも何故主人公は祖母の家に行ったんでしょう？勝手知ってる家とは言いながら、今は無人の人家。不用意に一人で行くべきじゃ無いと思うんですがね。誰がいるかも分からないし。意外さ、結局祖母の家から出てこようとした何者かの正体を明かさないままにした点です。
1542	呼び鈴	朧紙	一般審査員 I	12	11	11	11	12	57	浮浪者が住み着いてるのかとおもったけど、浮浪者なら呼び鈴を新しくする必要もないし、呼び鈴に反応して玄関に出てくることもないだろうし。他はそのままで呼び鈴を新しくして住んでる人ってだれだろう？？思い当たらない時点で怖かったです。
1542	呼び鈴	朧紙	一般審査員J	15	16	14	12	16	73	短編で読者に推理させることを面白いと思わせる良い話だった。
			合計	135	133	132	133	134	667	

No	タイトル	投稿者	評価者	怖さ	鋭さ	新しさ	ユーモアさ	意外さ	合計	書評
1531	母の手	太田 ユミ子	一般審査員A	17	17	15	14	15	78	悲しいことなのだが、この世の中は不変ではなく、つねに移ろいゆく。好きだと思ってた感情も、繋がったと思った気持ちも。だが、逆に言えば、それは、嫌いだと思っていた感情も、繋がらないと思った気持ちも、変わりゆく、ということだ。たしかに、怖い。「変化」というものは、もしかしたら、人がもっとも恐れるものの一つなのかもしれない。だからこそ、自分の中で確かだったこと、一瞬とはいえ、確かだったことを、永遠に閉じ込めなければならない。それこそが永遠なのだ。それこそが最も大切なものなのだ。哲学的な切り口が鋭い。しかし、解決が与えられてしまっている。さらなる深淵を目指すべし。
1531	母の手	太田 ユミ子	一般審査員B	7	5	5	6	6	29	幼い時の記憶と首を絞められている時の時間軸が分かりずらいです。その分、入り込めなくて怖さが半減してしまってます。
1531	母の手	太田 ユミ子	一般審査員C	15	15	15	15	15	75	インパクトはないかもしれないけど、この物悲しさは好きです。母親が愛しているのは、我が子なのか己自身なのか。幼い頃を思い出す主人公は、ある程度大人になっているでしょうに、母親にされるがままになっている・・・究極の愛情。母親の身勝手な自己愛、主人公の命さえ捧げる無償の愛。どちらが尊いのか考えさせられる作品でした。全体にまとまっていて美しい作品だと思いますが、なにか突出する要素があるとさらに良かったと思います。例えば怖さに重点をおくなら、自分の首を絞める母親は洒落た服装を身にまとい、化粧も美しく自分を良く見せることには努力を惜しまない自己愛の塊、とするなど。
1531	母の手	太田 ユミ子	一般審査員D	15	16	15	17	15	78	母に頬を撫でられて目が覚めるというシチュエーションは同じなのに、こうまでも違う状況があるだろうかと悲しくなりました。10年前は確かにあったはずの母の愛が、現在は自分のエゴしか感じられないのはとても悲しいです。怖いと言えば怖いのですが、個人的にこれは怪談…？と疑問に感じてしまう内容でした。
1531	母の手	太田 ユミ子	一般審査員E	5	5	5	10	5	30	母の愛情と狂気が交錯する描写が印象的で、上品さの中に静かな恐怖が漂う作品でした。ただ、整いすぎている分、登場人物の年齢感とのズレを感じました。「私」が成長して大人の精神を宿したナニカの存在であるなら、より深みが増す気がします。短編怪談としては美しくまとまっていますが、もう少し文量があれば余韻や恐怖の余白がさらに広がると感じました。
1531	母の手	太田 ユミ子	一般審査員F	17	15	16	15	17	80	幼い頃、母が見た夢の中では母が助けようとして手を差し伸べたけれど届かなかった。でも、それが夢で良かった、と語っていた母。なのに、今は母に首を絞められ殺されそうになっている。母の温かさはどこへ—？幼い頃というのは何時ぐらいの頃だろうか？3歳、4歳頃？最後の一文で、私は十年の人生で一番幸せだった—と書かれているという事は、首を絞められつつある現在も、わずか十歳だという事ですよね？それは怖いというよりもあまりに悲しすぎます。お母さんに何があったのでしょうか？母親の手によって殺されるのは辛く悲しいですね。
1531	母の手	太田 ユミ子	一般審査員G	12	18	12	14	14	70	人怖というか、やるせない、心の痛む話でした。十何年とかではなく、十年というのもまた悲しい。年齢の割にとても大人びた感じがするので、色々と苦労をしてきたんだろうと連想されます。文章は簡潔で綺麗にまとまっているので読みやすく、また、この短い文章に背景を無理なく詰め込んでいるのでお上手だなと感じました。
1531	母の手	太田 ユミ子	一般審査員H	12	13	15	12	14	66	怖さについてはほぼ感じませんでした。結局は子殺しの話なんですが、微睡の中で見せる幻のような感じがして、怪異とは言い難いです。鋭さ、全体的にふわふわした一種幻想的な文章の為、切り込んでくる様な緊迫感がありませんでした。新しさ、心霊を使わずに怪異を表現しようとする意欲は良いと思いました。一切母親に抵抗せず、首を絞められる主人公の気持ちはどんなものだったんでしょう？ユーモアさ、愛された記憶と、今まさに娘である自分を手にかける母。人という生き物の性が出ている気がして、そこがユーモアにもつながっていると思います。意外さ、この題材で短いながらも物語として完結している点です。幽霊、霊的なものは一切出さずに「子供を道連れに心中する母親」を描くという選択肢を選んだ所が思い切り良いなと思えます。
1531	母の手	太田 ユミ子	一般審査員 I	15	12	12	10	12	61	癒された母の手。その手が自分の生涯を終わらせる恐怖の手に。子供にとって母がどれほど偉大なのかが伝わってきました。母は自分を愛してくれる。自分にとって大切な存在なはずなのに。。。悲しいですね
1531	母の手	太田 ユミ子	一般審査員J	16	17	15	12	15	75	無理心中というか母の身勝手の恐怖を感じた。子どもは、母以外に頼ることができないため、良い思い出を走馬灯のように探してしまったのかと思った。非常に後味が悪いと思う。
			合計	131	133	125	125	128	642	